

石黒武顕著『鳥取県方言分布の実態』の資料性

岡 野 幸 夫

Yukio OKANO : The Characteristics of "The Actual Condition of Dialect Distribution
of Tottori Prefecture" by Takeaki ISHIGURO

鳥取短期大学研究紀要 第70号 抜刷

2014年12月

石黒武顕著『鳥取県方言分布の実態』の資料性

岡野 幸夫

Yukio OKANO : The Characteristics of “The Actual Condition of Dialect Distribution of Tottori Prefecture” by Takeaki ISHIGURO

鳥取県方言の言語地理学的研究に資することを目的として、石黒武顕著『鳥取県方言分布の実態』（以下『実態』）の方言資料としての性格を査定した。その方法として、国立国語研究所編『日本言語地図』と共通する方言項目の分布地図を比較し、その異同を分析した。その結果、『実態』のデータは信頼のおけるものであることが確認できた。また、『実態』の持つ特徴のいくつかも明らかにできた。

キーワード：鳥取県方言 方言地理学 日本言語地図 資料性

はじめに

本稿は、石黒武顕著『鳥取県方言分布の実態』（昭和 32 年刊）の資料性（方言資料としての性格）を確認し、今後の鳥取県方言の言語地理学的研究に資することを目的とする。

本書は出版年が古い上に私家版のため、広く閲覧・利用することが困難な状況にある¹⁾ものの、鳥取県方言をこれほど広く、かつ深く調査してその分布を明らかにしたものは他になく、非常に貴重な文献文化財であるといっても過言ではない。ただし、被調査者(研究者に対して方言情報を提供する地元の人)に関する情報が曖昧であるため、方言資料として利用するにあたり、若干の不安を禁じ得ない部分がある。そこで今回、全国的な大規模方言調査の成果である国立国語研究所編『日本言語地図』（昭和 41～49 年刊²⁾）と比較する。具体的には、『鳥取県方言分布の実態』と『日本言語地図』とで共通する項目の方言分布地図を比較し、その異同を検討する。これにより、『鳥取県方言分布の実態』の情報の「確かさ」を査定し、より有効な利用が可能となるようにした

い。

なお便宜上、以下『鳥取県方言分布の実態』を『実態』と略称し、『日本言語地図（Linguistic Atlas of Japan）』を『LAJ』と略称する。

1. 『実態』と『LAJ』について

ここでは、両書の方言資料としての概要をまとめる。『実態』については「序」により、『LAJ』については第 1 集付録 A「日本言語地図解説—方法—」による。いずれも詳細は原著によらねたい。

(1) 『実態』について

・調査期間：1952（昭和 27）年～1955（昭和 30）年

石黒氏は、これ以前に『鳥取県方言辞典』（参考文献 1）を編纂するため、1937（昭和 12）年～1952（昭和 27）年まで継続した調査を行っている。

・調査範囲：鳥取県内 185 市町村

1953（昭和 28）年から 1961（昭和 36）年にかけてのいわゆる「昭和の大合併」以前の市町村区分に従って、すべて石黒氏自身が実地踏査している。

・被調査者：詳細は不明

人数や年齢層の詳細は不明ながら、序文や凡例によると、老若男女に幅広く聴き取り調査を行ったようである。『鳥取県方言辞典』前編の序文では、同書編纂のため、県下の女子中等学校の生徒に広くアンケート調査を行ったことが分かり、そのデータも活用されたことが窺える。

・調査項目：600項目（26枚の図を含む）

このうち500項目は一覧表形式で分布を示し、100項目を地図化している。図は、調査の補助として用いられたものである（『LAJ』でも同様）。つまり、言葉で質問すると共通語形を「誘導尋問」してしまい、正確な方言調査にならない恐れがあるため、質問文の表現が困難な場合に図を援用するわけである。

・調査方法：著者自身が全県下をくまなく実地踏査

(2) 『LAJ』について

・調査期間：1957（昭和32）年～1964（昭和39）年

これ以前に1955（昭和30）年から1956（昭和31）年にかけて準備調査を行っている。

・調査範囲：全都道府県2,400か所

このうち鳥取県では30か所で調査された。調査地点の一覧は下記の表14を参照。ちなみに1958（昭和33）年度以降、沖縄県が調査地域に加わった。

・被調査者：各調査地点につき、1903（明治36）年以前に出生した、その土地生え抜きの男性1名男性に限定した理由は、性別を一定にするためと、女性は結婚等で生育地を離れる場合が多いことを考慮した結果である。また、1名に限定したのは、複数名の調査には多くの困難が伴うことが予想され、デメリットの方が多くなると判断した結果である。それでも適当な被調査者が見つからず、8地点で女性が被調査者となっている（鳥取県の調査地点は、この8地点には含まれていない）。

・調査項目：285項目（88枚の図を含む）

方言語形が多岐に互り、1枚の地図にまとめるこ

とが困難、不適当な項目が複数あり、地図は全300枚ある。

・調査方法：全65名の方言研究者が分担して現地へ赴き、被調査者と面接して所定の手続きに従って調査

鳥取県の調査を分担したのは鳥根大学教授（当時）廣戸惇氏。

両書を比較すると、以下のような差がある。調査期間については、『実態』と『LAJ』とで数年のずれがあるものの、ほぼ同時期の調査と言ってよい。調査範囲については、鳥取県について言えば『実態』の方が6倍以上緻密であり、しかも、1地点に採録されている方言語形の数も多いため、一部地域にしか見られない特異な語形が記録されている可能性が高い。被調査者については、『LAJ』が明確な基準を示しているのに対し、『実態』では不明な点が多い。もちろん、『実態』の内容を見る限り、石黒氏が学問的良心に従い、真摯な態度で調査を行ったであろうことは疑いないところではある。調査項目は、『実態』の方が2倍以上多くの項目を調査しており、民俗資料としての価値も高いものになっている。ただし、地図化されているのが600項目中100項目であり、方言分布を視覚的に把握できない項目が多いことが惜しまれる³⁾。調査方法は、両書とも研究者による実地踏査である。

次節以降、上述のような差異と特徴があることを踏まえて検討を進める⁴⁾。

2. 『実態』と『LAJ』の比較、分析

『実態』と『LAJ』とで共通するのは70項目であるが、そのうち『実態』で地図化されているのは22項目である。そこで本稿では、この22項目について、以下の方法によって比較する。

まず、共通する22項目について、1項目ずつ『実態』と『LAJ』の地図を熟視し、分布の共通点と相違点を把握する。その際、方言分布を類型化し、類

型が一致するか否かを判断することによって、大まかな比較を行う。次に、方言地図のデータを一覧表の形式でコンピュータに入力し、各方言語形が用いられる地点数や地域の偏りを数量的に把握する。

以上を総合して、『実態』の資料性を査定する。

(1) 共通する 22 項目の概観

表 1 に、共通する 22 項目を五十音順に一覧する。

『実態』列の数字は『実態』のページ番号を示す。

『LAJ』列の数字は地図番号を、丸数字はその地図が第何集に収録されているかを示す。また、『LAJ』で地図が複数枚あるものは、方言語形が多く、複数枚の地図に分割されていることを示す。

これらを『LAJ』第 1 集付録 A「日本語地図解説 — 方法 —」の分類⁶⁾にあてはめて示すと、以下ようになる。

A. 人

- ・人倫：ナシ

表 1 共通する 22 項目

語句	『実態』	『LAJ』
うお・さかな (魚) ⁵⁾	283	⑤ 216
おそろしい (恐ろしい)	287	① 42
おてだま (お手玉)	288	③ 145
おととのいばん (一昨晚)	289	⑥ 277
おにごっこ (鬼ごっこ)	290	③ 147
かえる (蛙)	337	⑤ 218
かたぐるま (肩車)	292	③ 149・150
かたつむり (蝸牛)	293	⑤ 236~238
かまきり (螻蛄)	294	⑤ 229・230
かみなり (雷)	295	⑥ 256
こうし (子牛)	299	⑤ 209
しあさって (明明後日)	301	⑥ 285
すずめ (雀)	342	⑤ 214
たけうま (竹馬)	309	③ 144
つらら (氷柱)	346	⑥ 262
とうもろこし (玉蜀黍)	313	④ 182
とかげ (蜥蜴)	348	⑤ 224
にじ (虹)	314	⑥ 259
ふくろう (梟)	353	⑤ 212
まないた (俎板)	324	④ 164
まむし (蝮)	325	⑤ 228
やる (遣る)	373	② 73

- ・人体・感覚：ナシ
- ・感情 (1)：おそろしい
- ・判断：ナシ
- ・行動 (1)：やる
- ・屋外生活：ナシ
- ・屋内生活 (1)：まないた
- ・遊戯 (4)：おてだま, おにごっこ, かたぐるま, たけうま

B. 自然

- ・日時 (2)：おととのいばん, しあさって
- ・天地 (3)：かみなり, つらら, にじ
- ・獣・鳥 (3)：こうし, すずめ, ふくろう
- ・魚・虫 (6)：うお・さかな, かえる, かたつむり, かまきり, とかげ, まむし
- ・栽培植物 (1)：とうもろこし
- ・野生植物：ナシ

「ナシ」の項目がいくつか見られるが、さまざまな意味分野にまたがっていると見てよさそうであり、『実態』と『LAJ』とで共通する 70 項目のうち、ごく一部の比較ながら、一定の成果が出るのが期待される。

(2) 分布の類型と遷移関係

鳥取県域は、伝統的に鳥取市を中心とする東部、倉吉市を中心とする中部、米子市を中心とする西部の 3 地域に大別することが行われている。これを踏まえて、鳥取県方言における、論理的に想定される分布の類型として、以下の 6 類型 (A~F) を設定した。

- A. 東部 ⇔ {中部 = 西部} (東西分布①)
- B. {東部 = 中部} ⇔ 西部 (東西分布②)
- C. {東部 = 西部} ⇔ 中部 (挟叉分布)
- D. 東部 ⇔ 中部 ⇔ 西部 (鼎立分布)
- E. {東部 = 中部 = 西部} (統一分布)
- F. 錯綜・特殊分布 (その他)

類型 A は、東部だけが異なる語形を持つもので、旧国名でいう因幡と伯耆の領域に対応した分布である。類型 B は、西部だけが異なる語形を持つもので、

方言区画論でいう因幡・東伯耆方言と雲伯方言に対応した分布である⁷⁾。これまでの検討では、この類型 A か B に当てはまる項目が多い。

類型 C は、中部だけが異なる語形を持つもので、一見、周圏分布に見えるが、歴史的、社会的に、鳥取県中部地域が中心地で、新語形の発信地であったとは考えにくい。むしろ山陽側の方言語形が東部と西部に進入した結果生じた場合が少なくないと思われる。そのため、敢えて熟さない「挟叉」という語を用いた。これに当てはまる項目はこれまでの分析では未だ見られない。

類型 D は、東部・中部・西部がいずれも異なる語形を持つもので、これを鳥取県の方言区画とする考えもある⁸⁾が、これに当てはまる項目はこれまでの分析ではほとんど見られない。

類型 E は、県内全域で同じ語形をもつもので、共通語形の分布としてよく見られる。方言地図を見ると、伝統的な方言語形の分布の上から、この類型が被さっている場合が多いため、そのような分布を解釈するにあたっては、この類型 E をいったん取り除いて検討する必要がある。

類型 F には、明確な分布の傾向が認められないものを含める。この他にも、海岸部 ⇔ 山間部や、都市部 ⇔ 農漁村部など、単に東部、中部、西部といった伝統的な地理的要因以外の要因によって分布が対立する項目がもしあれば、ここに含めることとする。但し、これに当てはまる項目はこれまでの分析では未だ見られない。

これらの類型は、相互に無関係ではなく、何らかの遷移関係を想定することができる（類型 F を除く）。すなわち、

- ・ 類型 A で、中部または西部が独自に変化→類型 D
(類型 D で、中部と西部が同化→類型 A)
- ・ 類型 A で、東部が中西部に同化→類型 E
(類型 E で、東部が独自に変化→類型 A)
- ・ 類型 A で、中部が東部に同化→類型 B
(類型 B で、中部が西部に同化→類型 A)
- ・ 類型 B で、東部または中部が独自に変化→類型 D

- ・ (類型 D で、東部と中部が同化→類型 B)
- ・ 類型 B で、西部が東中部に同化→類型 E
(類型 E で、西部が独自に変化→類型 B)
- ・ 類型 C で、中部が東西部に同化→類型 E
(類型 E で、東西部が山陽側と同化→類型 C)
- ・ 類型 E で、東部と西部が独自に変化→類型 D

以上の遷移関係を整理して図示すると、以下の図 1 のようになる。

さて、『実態』と『LAJ』で共通する 22 項目について、前述の類型を検討した結果、表 2 のようになった。

表 2 から、両書について類型ごとに集計すると表 3 になる。

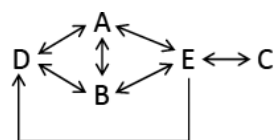


図 1 各類型の遷移関係

表 2 各項目の分布の類型

語句	『実態』	『LAJ』
うお、さかな (魚)	E	E
おそろしい (恐ろしい)	A	A
おてだま (お手玉)	A	A
おとといのぼん (一昨晚)	A	E
おにごっこ (鬼ごっこ)	E	E
かえる (蛙)	A	A
かたぐるま (肩車)	B	B
かたつむり (蝸牛)	E	E
かまきり (蟻螂)	A	A
かみなり (雷)	B	B
こうし (子牛)	D	D
しあさって (明明後日)	B	B
すずめ (雀)	B	E
たけうま (竹馬)	A	A
つらら (氷柱)	B	B
とうもろこし (玉蜀黍)	A	A
とかげ (蜥蜴)	B	B
にじ (虹)	B	B
ふくろう (梟)	A	A
まないた (俎板)	A	A
まむし (蝮)	A	A
やる (遣る)	B	E

表3 『実態』と『LAJ』の分布類型の集計

	A	B	C	D	E	F
『実態』	10	8	0	1	3	0
『LAJ』	9	6	0	1	6	0

類型が一致しないものがいくつか見られるが、それについては後述する。以下、各類型から代表的な語例を取り上げて説明する（但し、類型CとFは今回検討した22項目の中には存在しない）。

(3) 各類型の分析

以下の分析では、まず『実態』のデータを表にし、類型を判定し、その他に気付いた点についても述べる。次に『LAJ』についても同様にし、最後に両者を比較する。

『実態』では鳥取県内全185地域を調査しているが、これを東部78地域、中部44地域、西部63地域に分類して集計した。各地域の地理的範囲は以下の通りである（いわゆる平成の大合併後の行政区分による）。

東部：鳥取市、岩美町、八頭町、若桜町、智頭町

中部：倉吉市、湯梨浜町、三朝町、北栄町、琴浦町、大山町の東半分（上中山・下中山）

西部：米子市、境港市、大山町の西半分（逢坂）、日吉津村、伯耆町、南部町、江府町、日野町、日南町

『LAJ』では鳥取県内全30地点を調査しているが、これを東部13地点、中部8地点、西部9地点に分類して集計した。各地域の地理的範囲は『実態』に準ずる。また、『LAJ』では方言語形がローマ字表記されている。

1) 類型A「たけうま」

（『実態』の分布の検討）

表4には、多くの地域に見られる有力な語形を掲げた。表4に掲げたものの他、「さんがち」系として「さんがいし」「さんがし」「さんがいち」「さんぎゃーし」「さんげーし」が東部のみに少数ずつ見られる。これらは「鷺が脚」の音変化形で、竹馬に

表4 『実態』の「たけうま」の方言分布

	(地域数)		
	西部 63	中部 44	東部 78
たけんま	42	21	50
さんがち	0	0	55
たかあし	35	15	7
たかし	27	36	9

乗った姿を鷺に見立てた名称である。また、「たかあし」系として「たかはし」が少数見られる。これらは「高脚」とその音変化形で、竹馬に乗るとその分背が高くなることからの名称である。

共通語形に近い「たけんま」も相当の勢力をもって分布するが、これは共通語化の過程で浸透してきたものと見なし、伝統的な方言語形の検討からはいったん外して考える。これを除くと特徴的なのは「さんがち」系が東部にのみ見られることと、「たかあし」系が主に中西部に見られることである（中部は「たかし」が多く、西部は「たかあし」が多い）。東部に「たかあし」系が若干数見られるが、ほぼすべて気多郡に分布しており、中部（久米郡、河村郡）に隣接した分布になっている。典型的な類型Aと言える。

（『LAJ』の分布の検討）

表5には、2地点以上に現れる語形を掲げた。1地点にしか用いられていない3語は省略した。省略した3語は「SANGYAACI」「SANGEESI」「SANGENSI」で、いずれも東部にのみ分布する。

共通語形に近い「TAKENMA」はそれほど強い

表5 『LAJ』の「たけうま」の方言分布

	(地点数)		
	西部 9	中部 8	東部 13
TAKENMA	4	2	1
SANGACI	0	0	4
SANGASI	0	0	2
SANGEECI	0	0	2
TAKAASI	3	4	0
TAKAHASI	2	1	0
TAKASI	1	3	2

勢力ではなく、むしろ「SANGACI」系と「TAKAASI」系の勢力が強い。前者は東部にのみ分布し、後者は主に中西部に分布する。東部に分布する「TAKASI」は気高町浜村、鹿野町鷲峰のもので、中部に隣接する地点である。典型的な類型Aである。

(比較)

両者の分布の様相は、細かいところまで非常によく一致する。強いて挙げれば、共通語形に近い「たけんま」の分布の濃淡が異なることに気付くが、これは恐らく、『LAJ』が「老年層の男性1名」を調査した結果であるのに対し、『実態』は確認こそないものの、複数の年齢層の被調査者から得たデータを地図化しているため、老年層が使う伝統的な方言語形と、若年層が使う共通語形が両方とも地図化された結果であろう。事実、同一地域に「たけんま」と、「さんがち」系または「たかあし」系が両方とも分布することが多いことから、世代差を読み取ることができる地図データになっていることを窺わせる。

2) 類型B「かみなり」

(『実態』の分布の検討)

表6に掲げた語形の他、大勢に影響しない微弱な語形が約20語あるが、ここでは省略した。「どんどろけ」系は雷の音を象徴的に表したものである。また「なるかみ」は『萬葉集』にも用例を見出せる由緒正しい名称である。「よーだち」は夕立の音変化

表6 『実態』の「かみなり」の方言分布

	(地域数)		
	西部 63	中部 44	東部 78
かみなり	28	27	52
どんどろけ	4	43	64
どんどろき	0	0	18
なるかみ	13	3	12
なーかみ	10	0	0
なーかみさん	15	0	0
なりかみ	4	2	0
なりかみさん	5	0	1
よーだち	0	0	7

形である。

共通語形の「かみなり」の勢力は無視できないが、前項「たけうま」でも述べたように、いったん検討対象から外して考えると、特徴的なのは東中部に「どんどろけ」系が分布し、西部に「なるかみ」系が分布していることである。西部に見られる「どんどろけ」はその多くが中部寄りの地域で用いられている。また、中部の「なるかみ」は西部寄りの地域で用いられている。東部の「なるかみ」は無視できない数見られ、解釈が難しいが、過去のある時期までは「なるかみ」が全県域を覆っていたものと考えられる。その後、オノマトベの「どんどろけ」系が東部に侵入し、中部にまで広がっている、ということではないか。東中部の「どんどろけ」系と西部の「なるかみ」系がせめぎ合っている、類型Bと見なす。

(『LAJ』の分布の検討)

表7には、特徴的な語形を掲げた。表7に掲げたものの他、1地点にしか用いられていない5語は省略した。共通語形の「KAMINARI」の勢力はそれほど強いとは言えず、むしろ「DONDOROKI」系と「NARIKAMI」系の勢力が強い。前者は東中部に分布し、後者は主に西部に分布する。また、「YOODATI(夕立の音変化形)」が東部に分布する。類型Bであると見なす。

(比較)

両者の分布の様相はよく一致する。但し、西部に典型的な語形は『実態』では「なるかみ」系であるが、『LAJ』では「なりかみ」系である点が異なっ

表7 『LAJ』の「かみなり」の方言分布

	(地点数)		
	西部 9	中部 8	東部 13
KAMINARI	4	2	7
DONDOROKI	0	7	8
DONDOROKI	0	0	2
NARIKAMI	5	0	1
NAAKAMI	2	0	0
NARIKAN	1	0	0
NARUKAMI	0	1	0
YOODACI	0	0	2

ている。「なりかみ」は小学館『日本国語大辞典』第2版にも見出語として掲出されていない。「なるかみ」との濃厚な関係が予想されるが、これについては『LAJ』では「なるかみ」から変化したものと解釈している⁹⁾。

『実態』の方が、より多くの方言語形を採録している。調査地点数の多さと、被調査者数の多さが反映したものであろう。

3) 類型D「こうし」

(『実態』の分布の検討)

表8には、多くの地域に見られる有力な語形を掲げた。表8に掲げたものの他、大勢に影響しない微弱な語形が30数語あるが、ここでは省略した。この項目は、今回検討した22項目中、最も方言語形が多いものの1つである。牛は農耕、畜産、酪農などの生業に深く関わることから、子牛は愛情を注ぐ対象にもなる存在であり、様々な方言語形が発達したものであろう。

共通語形の「こうし」「うしのこ」を除くと、東部に「でんご」系、中部に「べーべ」系と「べーたー」系、西部に「べんた」系が濃く分布している。中部と西部の区切りがやや曖昧なところもあるが、地図全体としては類型Dと見なす。

(『LAJ』の分布の検討)

表9に掲げた語形その他、1地点にしか用いられていない9語は省略した。共通語形に近い「KOOZI」「KOUZI」「USINOKO」を除くと、東部に「DENGO」,

表8 『実態』の「こうし」の方言分布
(地域数)

	西部 63	中部 44	東部 78
こうし	13	10	10
うしのこ	37	13	8
でんご	0	1	76
でんごのこ	1	0	25
べーべのこ	14	25	0
べーべんこ	6	7	0
べーたー	0	17	0
べーたんこ	4	6	0
べんた	18	0	0

表9 『LAJ』の「こうし」の方言分布¹⁰⁾
(地点数)

	西部 9	中部 8	東部 13
KOOZI	0	0	2
KOUZI	2	0	2
USINOKO	4	2	0
DENGO	0	0	11
BEEBEE	0	2	0
BENTA	2	0	0
KOTTEGO	2	0	0

中部に「BEEBEE」、西部に「BENTA」と「KOTTEGO (ことい=特牛の音変化形)」が分布している。類型Dと見なす。

(比較)

両者の分布は概ね一致する。前項「かみなり」と同様、『実態』の方がより多くの方言語形を採録している。牛に関しては、子牛と成長した牛、雄と雌など、呼び分ける観点が様々に想定されるので、それらの方言地図とも関連した検討が必要になるが、それは今後の課題とする。

4) 類型E「おにごっこ」

(『実態』の分布の検討)

表10には、多くの地域に見られる有力な語形を掲げた。これを見ると、大きく「おに」系と「ほい」系に分けられることが分かる。表10に掲げたものの他、西部を中心に「つかまえごと」等の「つかまえ」系の語形がいくつかあるが、微弱な勢力である。「おに」系や「ほい」系の中にも、表10には掲げなかった微弱な語形がいくつかある。ちなみに「ほ

表10 『実態』の「おにごっこ」の方言分布
(地域数)

	西部 63	中部 44	東部 78
おにごっこ	11	9	14
おにごと	13	1	11
おにやい	2	1	14
ほいやこ	50	37	62
ぼーやこ	10	8	4
ほいやーこ	2	2	11

いやこ」は「追あいこ」の変化形である。

表10を見ると、「ばいやこ」が他を圧倒している。共通語形の「おにごっこ」はそれほど強くない。また、中部には「おに」系の語形があまり見られない。従って、類型Eと見なす。恐らく、伝統的な「ばい」系の分布の後から、共通語形の「おにごっこ」が東西から侵入してきている途中の様相を示しているのであろう。

(『LAJ』の分布の検討)

表11には、鳥取県内に見られる語形をすべて掲げた。「BOIYAKO」が県内全域に分布し、「ONI」系が主に東中部、「MEKURAGO」と「CUKAMAE」系が西部に分布している。地点数の多寡に注目し、類型Eであると見なす。

(比較)

鬼ごっこという遊戯は、遊び方やルールが千差万別であり、それによる名称の違いがあることが当然予想されるが、『実態』『LAJ』ともに、そこは考慮せず総称としての言い方を調査しているようである。

両者とも類型Eであるとしたが、全体的な傾向も一致する。『実態』の方がこまかい語形の差を拾い上げてデータ化している。これは、『LAJ』に「おにごっこ」にあたる方言形は複雑多様であり、それらの異形を細部にわたって凡例の上に反映することはむずかしく、かりに成功しても図が煩雑になる。」として、かなり幅広い語形の変種を1つにまとめる処理をしていることによる¹¹⁾。

表11 『LAJ』の「おにごっこ」の方言分布
(地点数)

	西部9	中部8	東部13
BOIYAKO	3	6	6
OIKONGO	0	0	1
ONIGOKKO	0	2	3
ONIGOTO	0	1	2
ONiyAI	0	0	1
ONI	1	0	1
MEKURAGO	1	0	0
CUKAMAEONI	1	0	0
CUKAMAeko	1	0	0

(4) 類型が一致しないものの分析

ここでは、表2で類型が一致しない「おとといのばん」「すずめ」「やる」について検討する。但し、このうち「すずめ」と「やる」は、以下に述べる理由から、例外として検討から除外する。まず「すずめ」については、『実態』では音韻項目として調査されており、「し・す」「じ・ず」の発音の区別を調査する項目になっている(鳥取県西部を含む雲伯方言では両者を区別しない)。この点、『LAJ』が語彙項目として調査していることを考えると、異なる類型になるのは当然であり、問題とするには当たらない。また「やる」については、『LAJ』に「この地図では、とくに対等の授受に関するものだけを図示しているので、注意してほしい。」とある¹²⁾。一方、『実態』ではそのような制限なしで調査していると思しい(「しんぜる」「ひんぜる」など、「進ぜる」系の敬語形が数多く採録されている)ことから、異なる方針で調査された結果、異なる類型になるのは当然であり、これも問題とすることはできない。

以下、「すずめ」と「やる」を除き、残った「おとといのばん」(『実態』類型A、『LAJ』類型E)について分析する。分析の方法は前節にほぼ準ずる。

(『実態』の分布の検討)

表12では、分布の特徴をより明確に浮かび上がらせるため、大きく「おととい」系と「きのー」系の2つに分類し、2つの系を用いる地域数を、それぞれ重なりを除いて集計した。地域数の後ろのパーセンテージは、その地域に対する割合である。例えば、西部の「おととい」系では、全63地域中、41地域(65.1%)で「おととい」系を用いている、ということである。

表12 『実態』の「おとといのばん」の方言分布
(地域数)

	西部63	中部44	東部78
「おととい」系	41 (65.1%)	31 (70.5%)	68 (87.2%)
「きのー」系	54 (85.7%)	42 (95.5%)	56 (71.8%)

「おととい」系には共通語形の「おとといのばん」の他、「おとついのばん」「おとついのばんげ」等がある。また、「きのー」系には共通語形の「きのーのばん」の他、「きんによのばん」「きのーのよーさ」等がある。これらの方言語形の語構成は「昨日、一昨日」にあたる前部分と、「晩」にあたる後部分と、両者をつなぐ助詞「の」部分とから成るが、ここでは有意差が見出される前部分に着目して分類した。

「きのー（昨日）」系は、1日を日没から翌日の日没までと捉える前近代的な時間感覚によるものである。

分布を細かく見ると、同一の地域に「おととい」系と「きのー」系の両方が用いられている場合が半数以上見られる。同じ意味を表す形式が複数あると、コミュニケーション上の混乱を惹き起こしかねないため、このような状況は起こりにくいと思われるが、これはどう解釈すべきであろうか。筆者は、『実態』のデータは複数の年齢層の方言使用の様相を反映した可能性があると考えている。すなわち、若年層は主に「おととい」系を用い、高年層は主に「きのー」系を用いている、という状況をデータ化していると思われる。

結論として、この分布は、伝統的な「きのー」系が共通語形の「おととい」系に取って代われようとしている世代交代の過程の一断面を示しており、東部の変化の進行が中西部より速いということであろう。これは『実態』の当該地図の「備考」に、「交通頻繁の地域から段々減んでなくなって行くことば」とあることとも符合する。東部の変化が中西部より速い、という点を重視し、類型 A と見なす。

（『LAJ』の分布の検討）

表 13 も、表 12 と同様に集計して示す。表 13 によると、共通語形に近い「OTOCUI」系が最も濃く分布するのは西部であり、中部から東部へと行くにつれて分布が弱まっている。各地域の差はなだらかで、明確な線を引き難いため、類型 E と見なす。

（比較）

『実態』と『LAJ』とで類型が異なっている。し

表 13 『LAJ』の「おとといのばん」の方言分布
(地点数)

	西部 9	中部 8	東部 13
「OTOCUI」系	8 (88.9%)	6 (75.0%)	8 (61.5%)
「KINOO」系	1 (11.1%)	2 (25.0%)	5 (38.5%)

かも両者は東中西部の各地域における「おととい（OTOCUI）」系の占める割合において、逆の様相を呈している。これは『LAJ』が「老年層の男性」という明確な被調査者を設定しているのに対し、『実態』では複数の年齢層が混在したデータを地図化したところから、このような相違が生まれたものと考ええる。前項で分析した「たけうま」と同様、『実態』のデータは、複数の年齢層の方言の様相を推察できる利点を持つ一方、データの純粋性においてはやや劣る、ということが言えよう。あるいは、『LAJ』は調査地点数が『実態』に比して少ないため、誤差が大きく出た、と考えることもできる。

3. 『実態』の資料性

以上の検討を踏まえ、『実態』の資料性について検討する。

『実態』と『LAJ』で共通する 22 項目中、19 項目 (86.4%) で類型が一致した。一致しない 3 項目の内 2 項目は、例外として処理できるものであり、残る 1 項目も、致命的な矛盾を孕むものではなかった。

以上から、『実態』の資料性は高く、そのデータは信頼して利用できると言える。もちろん盲信は禁物であり、利用にあたっては分布を慎重に解釈した上でなければならないことは言うまでもないが、大筋において穏当なデータが提供されている、ということを確認できたことの意味は大きいと考える。

留意点として、以下の点を挙げる。

- ・『実態』では、複数の年齢層の様相が 1 枚の地図に反映されている場合があること
- ・『LAJ』と比較して、鳥取県内のより詳細な分布

表14 『LAJ』と『実態』の地点対照表¹³⁾

『LAJ』 地点番号	『LAJ』 地点名	『実態』 地域名
6407.43	岩美町浦富	浦富
6417.14	国府町栃本	大茅
6416.09	鳥取市立川町	稲葉
6406.77	鳥取市賀露町	賀露
6416.58	河原町袋河原	河原
6417.72	八東町安井宿	安部
6417.85	若桜町赤松	若桜
6427.27	若桜町岩屋堂	池田
6426.04	佐治村畑	佐治
6426.47	智頭町波多	富沢
6427.40	智頭町郷原	山形
6406.92	気高町浜村	浜村
6416.31	鹿野町鷺峰	小鷺河
6405.95	羽合町宇野	宇野
6415.78	三朝町丹戸	小鹿
6415.83	三朝町助谷	旭
6415.23	倉吉市海田	上井
6415.80	関金町関金宿	矢送
6414.17	東伯町鋤	下郷
6414.25	赤碕町宮木	以西
6404.83	中山町赤坂	下中山
6413.29	大山町宮内	大山
6413.43	米子市糺町	米子
6413.10	米子市和田町	和田
6413.76	岸本町大殿	大幡
6423.23	西伯町下中谷	上長田
6424.20	江府町貝田	江尾
6423.75	日野町黒坂	黒坂
6433.34	日南町上石見	石見
6422.77	日南町阿毘縁	阿毘縁

の様相を検討できる場合があること(例:「つらら」「とうもろこし」「とかげ」など、東部に比して西部が複雑な分布様相を呈する項目が複数ある)
 ・逆に『LAJ』では日本全国の様相を観察できるため、鳥取県に見られる語形が、他の都道府県にも見られるか否かを検討し、より広い視野で方言分布を解釈できる利点があること

おわりに

本稿での検討を踏まえ、今後は検討した共通する

22項目について、なぜそのような分布になっているのかについての言語地理学的研究を進めたい。また、地図化されていない残りの共通項目についての分析も進める必要がある。

参考までに、『LAJ』の地点を『実態』の地域と対照させると表14のようになる。この表に基づき、両書の方言語形の一致度をより詳細に分析することも、今後の課題である。

注

- 1) 鳥取短期大学図書館をはじめ、県内のいくつかの公共図書館に所蔵されている。
- 2) 参考文献3~8の全体を電子化したものが、国立国語研究所の「『日本言語地図』地図画像」のWebサイトで公開されている。ダウンロードも可能。
(http://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/laj_map/)
- 3) 一覧表のデータを機械可読形式のデータにできれば、表計算ソフトや統計ソフト等による電算処理も可能になる。
- 4) なお、『実態』の序文に「前例稀な全県全域調査により、学界教育関係者多年の待望に応えるべく、鳥取県方言分布の実態(国立国語研究所が製作計画中のひとつ目で判る言語図鑑の一環)を究明したいと念願すること二十有余年漸くその念願の一部を達成することができた」とあり(石黒1957, p. 6, 下線筆者)、石黒氏は『LAJ』の企画が進行中であったことを知っておられたようである。
- 5) 「うお・さかな(魚)」については、『実態』が「うお」、『LAJ』が「さかな」の項目であるが、方言の分布から見て、本稿では同じ項目として扱う。
- 6) 参考文献3の別冊 p. 4.
- 7) 参考文献9, p. 6.
- 8) 参考文献10, p. 18.
- 9) 参考文献8の別冊 p. 17.
- 10) 表中の「BEEBEE」と「KOTTEGO」は、『LAJ』

の地図凡例ではそれぞれ「BE(E)BE(E)」と「KOT(T)E(E)GO」となっている。これは、『LAJ』において、複数の音変種を1つの記号にまとめたため、地図の凡例に載せるにあたり一般化された記法である。この場合、長音や促音を伴う音変種を括弧で示している。当該地点で採録された実際の方言語形は、注2で公開されている。『LAJ』作成のために使用された調査カードの画像データを閲覧し、これを表に反映させた。

11) 参考文献5の別冊 p. 93.

12) 参考文献4の別冊 p. 31.

13) 表中、国府町栃本の地点番号が原著では「6117.14」とされている（参考文献3の別冊 p. 83）が、同書に規定された地点番号の割り当ての法則に従えば「6417. 14」が正しいと思われるので、訂正して掲げた。

参考文献

- 1) 石黒武顕『鳥取県方言辞典』前編・後編，私家版，1951年～1952年.
- 2) 石黒武顕『鳥取県方言分布の実態』私家版，1957年.
- 3) 国立国語研究所『日本言語地図』第1集，大蔵省印刷局，1966年.
- 4) 国立国語研究所『日本言語地図』第2集，大蔵省印刷局，1967年.
- 5) 国立国語研究所『日本言語地図』第3集，大蔵省印刷局，1968年.
- 6) 国立国語研究所『日本言語地図』第4集，大蔵省印刷局，1970年.
- 7) 国立国語研究所『日本言語地図』第5集，大蔵省印刷局，1972年.
- 8) 国立国語研究所『日本言語地図』第6集，大蔵省印刷局，1974年.
- 9) 室山敏昭『鳥取県のことば』（日本のことばシリーズ 31），明治書院，1998年.
- 10) 森下喜一『鳥取県方言辞典』富士書店，1999年.